

「が食へたその豚 オリーブは備の肉を食へてもいい」と言
たか。言われないままに食(く)つただろう。おまえはその豚
をぶつ殺したんだよ。そのことに悲しみがない限り、いくら
仏法を聞いても聞こえてこない」と激しい口調で言われたこ
とが、今も忘れられない。

「いのちが大切」・「いのちは地球よりも重い」というこ
とばをよく見聞しているが、いのちを犠牲にしているのが私
であるということが明瞭になつてこない限り、いのちの問題
が明瞭にならないのではないか。

ある地方の仏教講演会において、聴講者の一人から「私は、
筋ジストロフィーという病気で生活していく中でずいぶんた
くさんの方々の手を借りています。こんな私が生きている価
値があるのでしょうか」という質問が出た。講師はその方か

私が以前受講していた学習会でのことである。「おまえ、今日の夕食、何を食べてきました」と先生から聞かれ、私は「とんかつを食べてきました」と答えたところ、師のいわく「おまえが食べたその豚、おまえに俺の肉を食べてもいいよ」と言ったか。言われないままに食(く)つただろう。おまえはその豚をぶつ殺したんだよ。そのことに悲しみがない限り、いくら仏法を聞いても聞こえてこない」と激しい口調で言われたことが、今も忘れない。



第30号
平成29年
(2017年)
1月・2月
・3月号
発行：編集
岡崎別院
輪番 福田 大

「あなたの質問に対し「価値」としてはないかも知れません。なぜ、あなたは、いのちを価値でしか見られないのですか」と応えられたということである。

価値だけでいいのぢを論ずるならば、殺人事件において殺したものといのちと殺されたものいのちとでは、当然大きな隔たりがそこにあり、殺されたもののいのちの尊さを提唱することは、至極自然なことである。しかしそのことは、同時に殺したものいのちは殺されて当然とする価値ではないか。いのちが本当に平等であるならば、殺したものいのちと殺されたものいのちも平等であるはずではなかろうか。しかしながら、我が国日本では、殺したものいのちは殺してもよいということが死刑制度という名の下において執行されている。

修正会

二月の法座案内

- | | | |
|--|----|----------------|
| ○ 一月 三日(火)九時半 | 輪番 | 宗祖を訪ねて |
| ○ 二月 三日(金)十四時 | 輪番 | 味讀正信偈 |
| ○ 三月 三日(金)十四時 | 輪番 | ○ 二月十三日(月)九時半 |
| ○ 一月十三日(金)十時 | 輪番 | ※引き続き三日講新年会 |
| ○ 二月二十三日(木)九時半 | 輪番 | ○ 三月十三日(月)九時半 |
| ○ 三月十三日(月)九時半 | 輪番 | ○ 二月二十三日(月)九時半 |
| * 二〇一七年より「定例法話」に代わり、列座が担当する「歎異抄を読む」を開始します。 | 輪番 | ○ 一月二十三日(月)九時半 |
| 歎異抄を読む | 輪番 | ○ 二月二十三日(木)九時半 |



十一月二十七日挙式
松居 宏枝さん
リュウシユ
マルクスさん

A photograph of a man and a woman in traditional Japanese wedding attire. The man is wearing a black shiromuku (white collar) over a white keikogi (wedding kimono), and the woman is wearing a white shiromuku over a white keikogi. They are standing in front of a building with large windows.

A photograph of a man and a woman in traditional Japanese wedding attire. The man is wearing a dark blue or black kimono with a white belt and a small circular emblem on the chest. The woman is wearing a white kimono with a delicate pattern and a white headpiece decorated with orange and yellow flowers. They are both smiling and looking towards the camera.

結婚式

二〇一七年
一月十六日

石伊・井藤家

「剣座のつぶやき」

上の段に日時などを記載していますが、来年一月より「定例法話」に代わり「歎異抄」を主とした法座を担当することになりました。

三日講の皆さんには顔を覚えていた大いところかと安心していましたが、次は前に出て話をしなければならないと思うと、既に緊張をしております。

いずれ皆さんの中で法話ができるようになりますことは思っていましたが、いざその機会をいたぐと「やつぱりまだ後でも」と思う自分を隠しきれません。やらなければできるようにもならないと言ひ聞かせながら、少しずつ準備をしております。

宗史蹟親鸞聖人岡崎草庵跡 真宗大谷派(東本願寺)

岡崎別院

〒606-8335
京都市左京区岡崎天王町

26番地

電話・FAX 075-771-2921

<http://okazakibetsuin.com>
info@okazakibetsuin.com

二〇一六年度岡崎別院報恩講

報恩講前おみがき

十月二十三日、信悟院殿御参修、真城義麿師御教導によつて、当院の報恩講が厳修され、総勢およそ百五十名が参勤・参詣に訪れた。

本山定衆・堂衆・参衆並びに山城組内法中が出仕され、岡崎別院雅楽会による樂が奏でられる中、お勤めが行われた。

お勤めの後、「まさに願わくは衆生とともに」という講題で真城師による法話が行われた。参詣の方々はそれぞれにうなづくなど、熱心に聞き入つておられた。また、法話後には参勤・参詣の方々に

お斎が配られた。持ち帰られる方の他、書院や庭園に用意された床机で召し上がるなど様々な姿が見られた。

あわせて茶室「翠雲亭」や庭園では抹茶接待が行われ、一時は茶室内が満員になり、行列が出来るほど盛況となつた。

参勤・参詣の皆様、並びに組内住職・坊守を初めとした寺院関係者の皆様、御門徒・三日講員の皆様には、当日だけではなく、事前準備・清掃などに多大な協力をいただきましたことを、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

十一月十一日～十七日までの間、南米開教師候補の清水亨氏が別院にて研修を行いました。朝の晨朝勤行から閉門まで別院で研修を行い、結婚式も準備からお手伝いいただきました。研修後に別院で過ごされた感想を書いていただきました。

十一月十一日～十七日までの間、南米開教師候補の清水亨氏が別院にて研修を行いました。朝の晨朝勤行から閉門まで別院で研修を行い、結婚式も準備からお手伝いいただきました。研修後に別院で過ごされた感想を書いていただきました。

このたび南米開教師候補として岡崎別院において研修をさせていただきました。自分の生きにくさは、常に自分を他者よりよく見せようとする比較的心に振り回され、自分と他者を疎外していく自己中心性にあると教えられました。

そして今回この別院研修で、ご門徒さんや寺院住職さん等の互いに協力し合う生き様の中に、自分のこの問題性を乗り越えていく方向性があると感じました。南米の方々とも、同じく自らの課題を教える前に見据えながら、共に生きるものへと育てられていきたいと思ひます。

落語とバンジョーのタベ



桂塩鯛氏の落語

吉崎氏の演奏

吉崎氏の演奏